

# 「沃土プランによる 沃土プラント」

“野良の藝術へ向けた前哨”

## アート機能回復

廃棄物を彫刻としたジャンクアートが20世紀美術史で語られ久しいが、これに限定せずとも、アート自体もまた新たな廃物の増産とは言えまいか。今日、私たちを取り巻く社会において効率を求められるが故に、放射能や農薬、化学肥料、遺伝子組換えなどが先行し、事情はより深刻となっている。

今回の作品では、閉鎖した倉庫に残されたパレットを原点のプラント(plant)の原意・植物を育てる意味としての装置として組み立て、農の役割に転化させる。その内部空間には、内壁に縄文思考を喚起させる札が貼られ、三苗の百姓が乱舞した。

この展示の後、作品はファームに持ち込まれ、実際に堆肥作りが開始されることで社会的働きかけをもってアートの機能回復・農の復権を図る。

社会芸術 / ユニット・ウルス 沃土プラン

Email: [syakaigeijyutu@icloud.com](mailto:syakaigeijyutu@icloud.com) <https://artngo16.wixsite.com/socialart>

安部大雅、渋谷廣文、蒼浩人、長谷川千賀子、森山哲和、吉田富久一 協力

考古造形研究所



写真下、2019年1月の宝船展/埼玉県立近代美術館後の様子



2017年、ファーム・インさぎ山(さいたま市緑区)にて煙突オブジェを用い、もみ殻燐炭やメタセコイアの炭を焼く様子 写真:石崎幸治)



札のメッセージ 縄文思考/蕩尽について

蕩尽是、現在は財産を蓄積せず使い果たしてしまう意味に使われるが、使い尽くすことで、ちゃんと循環させる意味をもつ。無償の贈与であり「おもてなし」である。社会における資本の蓄積と次元を違え存在する。



2019年1月19,20日 パフォーマンス/蒼浩人

## 農が都市をささえている

埼玉県見沼・三室での展開について

見沼は古来より御沼とも謳われ讃えられる湖沼・湿地であり、江戸時代の新田開発後は広大な穀倉地となり都市(江戸)の胃袋をささえてきた。同時に豪雨の際には遊水池として江戸・東京の水害を緩和の役割をはたした。見沼三原則以来の無住の歯止めがあり、現在緑地化計画法に守られているものの、水田は僅か4パーセントまでに減少。しかし、その緑地に将来を見据えれば、人口減少(100年後現在の3分の1に減少 内閣府統計資料)に予想される都市の空洞化のなかで、残された人は緑地へと向かい、本来の農に目覚め、安全な食の復権を求めるのではないだろうか。

農が都市を支えている。都市の中に農地を内包するさいたま市ならではのテーマ提案が「沃土」。今回のねらいである。

プラントとは、一般にイメージされる工場施設としてではなく、そもそもが農における沃土づくりから発した言葉である。つまり、テクノロジーの発展の原点に農がある。

人間は宇宙に飛び立とうとも、大地に根ざし自然の中で連綿と支え合う様々な命の中であって、自然の一部としてしか生きえない。生命のボーダーとしての警告がある。

近年各学会等で黒ボク土に人為の炭の痕跡が認められ報告された。縄文以来、一万数千年の長きにわたって見沼の畔、三室に住んだ人々は田畑を耕し、野焼きや堆肥を施し沃土を形成してきた。我々はその原点に遡ろうと考えた。

美術館の天井に届かんばかりにそびえ立つ六角形構造物。その素材は閉鎖される倉庫の奥に眠っていた重々しい木製の米(こめ)用パレットで、戦後間もなく作られたものだ。今回、堆肥作りの囲いとして組み立てられることで、産業廃棄物としての焼却を免れた。美術館での展示の後に、INAKA Projectの畑へ持ち込まれ再設置され、実際の堆肥づくりが開始される。

沃土プランでは、来る2020年の芸術祭を迎えるにあたり堆肥をつくり、沃土をこしらえる計画であり、さまざまに縄文思考の回復を図ろうとしている。

2019年3月15日

## 三苗の百越・百姓踊り

今から2万年ほど前までは氷河期で、東チャイナランドが大きく拡がり、日本列島は大陸に含まれていた。境界付近には古・三苗族という先史時代人が暮らしていた。氷河期が終わり大陸と島嶼が分離すると、同族は日本列島側と遼東半島付近とに別れて住むことになる。

列島側では種子を携えて日本列島にやってきた三苗と、獲物を追って北方ツングースとが混血して縄文人となる。彼等は狩猟採集と焼畑を頼りに独特な土器を焼く。

一方大陸に別れた三苗・百越の民は水稻の灌漑や洪水から身を守る土木事業を得意とした。やがて、海を挟んで同族の住む彼の地のことは、伝承の域へと遠退いていく。